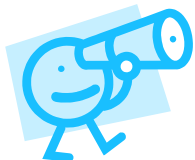


## 調査事例紹介：その39 豊中が舞台の小説と伊達巻



豊中市立図書館には、毎日いろいろな調査の依頼が届きます。

そのうちの一部をご紹介します。

Q. 三島由紀夫著の、映画化もされた小説で、豊中を舞台にしているものがあると聞いたが何というタイトルか。他にも豊中を舞台にした小説があれば知りたい。

A. 『文学にみる豊中の古迹』（鹿島友治）によると、三島由紀夫の『愛の渴き』が豊中の熊野田を舞台にしている。他にも、『お月様と犬』（槇さえ）：庄本、『閑古堂日録』（石塚嘉門）：原田神社、『石を投げる』（小椋鳥黄）：庄内、『三重のお茶屋さん』（加藤とみ子）：新千里、『青春』（石丸梧平）熊野田・岡町・蛭池、『玄関の孤独・家』（小寺正三）熊野田・岡町、など、豊中が舞台の作品は多数ある。

Q. 伊達巻の由来を知りたい。

A. 『たべもの語源辞典』（東京堂出版）『たべもの起源事典』（筑摩書房）『衣食住語源辞典』（東京堂出版）などの本によると、「伊達巻」は、発祥年代は不明であるが、かまぼこ製造で余った卵黄を利用して創作された食べ物で、人目を引く派手なこと、粹であること、外見を飾ることの意味である「伊達」を用いるその名前の由来は、見栄を張るという説、渦巻き状に巻く動作が伊達巻帯を締めることに似ているという説、江戸初期から元禄にかけて、流行った伊達模様（友禅・絞り・刺繍などの技法を応用した、豪華絢爛な模様）のように華美で人目を引く卵焼きの巻物という説など、諸説ある。

これらの事例について詳しく知りたい方は、豊中市立図書館のサイトの「レファレンス事例をさがす」のページから、フリーワード「豊中 小説」「伊達巻」で検索してみてください。